

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究は、知的障害児が示す日本語の文理解及び表出における困難の特徴を明らかにするとともに、音韻記憶や視点取得といった認知能力との関連を検討し、文の理解や表出の困難に関与する背景要因を明らかにすることを目的としている。従来、知的障害児の多くは言語発達に何らかの遅れを示し、発達の個人差も大きいことが指摘されている。特に文法については加齢に伴う発達を示しにくく、効果的な指導方法の考案が重要な課題となっている。しかし知的障害児の文理解や表出に関しては、英語を対象とした研究に比して日本語に関する研究が極めて少ない。文理解や表出には形態的側面と統語的側面が関与するが、日本語の場合、語順や格助詞、動詞の接辞の違いに応じて表現する意味が異なるという特徴から、特に受動文や使役文などの理解や表出における困難が生じやすい。さらにこれらの文理解や表出には、その背景要因として認知能力が深く関与するが、知的障害児を対象として文法能力と認知能力との関連を検討した研究は非常に限られている。本研究は、言語学や心理学の知見に基づいて知的障害児の日本語の多様な構文理解や産出の特徴を詳細に検証した点、理解や産出に及ぼす音韻記憶や視点取得の影響について実証的に明らかにした点、自閉スペクトラム症の有無による影響を検証した点など、従来の研究にはない意義と独創性が認められる。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究では、知的障害児ならびに幼児の文の理解や表出に関する国内外の先行研究を踏まえ、それらの知見を集約し、妥当性の高い実験心理学の手法に基づいた検討を行っている。知的障害児の場合、言語発達や認知発達の遅れにより、標準化された言語検査や認知検査の適用が難しい場合が多い。特に知的障害児や自閉スペクトラム症児を対象とした研究では、障害に伴って生じるコミュニケーションや教示の理解、反応の難しさに対応した課題設定が求められる。本研究では、教示や反応における課題要求を軽減した課題設定を行うとともに、子どもの負担が少ない遂行方法や発達の個人差に応じた段階的な評価基準を設定するなど、知的障害児の特性を踏まえた客観的測定を行っている。以上のことから、本研究で用いられている方法は当該研究分野において妥当であると判断できる。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本研究では、知的障害児や幼児の言語発達に関する心理学的研究、文構造等に係る言語学的研究などの国内外の学術論文を中心に、最新の研究動向が綿密に押さえられている。障害児を対象とした研究では倫理的配慮における制限も強く、相応の数のデータを収集することに困難が生じやすい。本研究ではデータの収集にあたって、知的障害児の生活年齢や精神年齢、自閉スペクトラム症の有無などを統制しながら実験的研究として必要なデータを収集しており、さらに対照群として定型発達児のデータをあわせて収集するなど、研究資料の収集は質・量ともに十分であると判断される。またデータ収集に際しては、特別支援学校との十分な連携を取り、研究参加者への倫理的配慮および研究倫理に関する所定の手続きに基づいて適切に行われている。データの分析に関しては、知的障害児の発達水準や障害に応じた特性の影響も十分吟味されており、分析に使用した統計的手法やその解釈も妥当なものである。以上のことから、研究資料やデータの収集

及び分析について適切と判断できる。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

本研究では、定型発達児と比較して知的障害児の受動文や使役文の理解成績が顕著に低いこと、その原因として文頭の名詞を行為者と解釈する動作主バイアスや、2つの名詞句の後に他動詞が続く文を「行為者—被行為者—行為」と解釈する語順ストラテジーに依存していること、語順を交代したかき混ぜ文において他動詞の項の関係性を正しく理解する上で、音韻記憶が重要な役割を果たしていることを考察した。また文表出については、知的障害児は視点の移動に伴う態の変換に困難があること、音韻記憶は受動文や使役文のような統語的に複雑な構造を有する文の表出において影響を及ぼすことを示し、音韻記憶の弱さによる処理の負荷によって統語知識へのアクセスに困難が生じやすいことを考察した。一方、自閉スペクトラム症の有無による文理解や産出、認知能力の関与については顕著な特徴は示されなかった。この点については、個々の対象児について自閉スペクトラム症児特有の認知能力の特徴を検証する必要があるという新たな研究課題を提起して、論理的な仮説を提示しつつ考察している。以上のことから、本研究でなされている考察及び結論は妥当であり、十分な学術的水準に達していると評価できる。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本研究では、言語学的な知見に基づいて知的障害児の文理解や表出の特徴を適切かつ客観的方法によって明らかにするとともに、音韻記憶や視点取得等の認知能力が及ぼす影響を実証的に検証し、その結果を踏まえて子どもの発達段階に応じた効果的な指導方法の観点や重要性を指摘している。言語活動の充実や思考力・判断力・表現力の育成が求められる現代の教育において、知的障害児を対象とした特別支援学校では指導に一層の難しさが生じていることが指摘されている。特に言語の理解や表出に関する指導・支援に関する知見は不足しており、本研究の成果は、知的障害児への教育指導における有益な示唆を与えるとともに、障害児を対象とした言語発達研究や心理学的研究の発展に寄与するものとして学問的意義が高いと認められる。以上のことから、本研究は取得学位に相応しい意義や成果が十分に認められる。

以上の点を総合的に判断し、審査委員会は全員一致して、本論文が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士（教育学）学位授与に十分に相応しい研究であると判定した。